
苗字が「はたけ」になりまして

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

苗字が「はたけ」になりました

【Nコード】

N2767BA

【作者名】

椋

【あらすじ】

このお話は、ただの小娘がナルトの世界へ転生し、生まれ育ち結婚し子が出来て、そこから始まる夢物語でございます。

思いついたら書かないと気が済まない作者の妄想で出来ているので、原作とずれが生じている場面も存在します。

そして超不定期連載なので、気長にお読み頂ければ幸いです。

壺

愛されたいと願うことは、いけないことですか？

愛したいと願うことは、間違っていますか？

私は思うのです。

こんな自分が、「未来」で泣き方を忘れたあの子達と、「過去」と呼ばれる今出会ったのは、きつと運命だったのだと……。

気が付けば私は、火の国に生まれ木の葉の里で育ちそして結婚し……子を身ごもっていた。

「ねえ、貴方は幸せ？」

揺り椅子で毛糸の帽子を編む私は、不意に自分の夫へ問いかけた。

「ん？そりゃ、美人な嫁と優秀な息子とこれから生まれてくる可愛い赤ん坊に囲まれて幸せじゃない男はいないだろ？」

「そう、ならいいのよ」

……そう、それなら良いの。貴方が幸せなら、私はそれで十分。そうしてまた、陽の当たる大きな窓の傍で編み物を再開させた。

「……なんだっただ？」

何て、あの人は不思議そうにこちらを見つめるけど知らないふりをして。

「ああ、そう言えば聞いたか？四代目様にお子が出来たんだと」

……世間話のように空気を流れたその言葉を聞いて、私は動揺のあまり手から毛糸を落としてしまった。……ここところころ、転がる毛糸を見つめ聞き返す。

「四代目様とクシナ様に、子が……？」

「おい、毛糸落としたぞ？……ん？ああ、そうらしい。順調に生まれりやうちの2人目と同級だなあ」

ああ、夫の呑気な声が遠い……まるでコダマのように脳内へ響き私を苛む。

「……そう、なの」

まだ膨らんでさえいない腹を気にして、夫はあまり私が動き回ることを良しとしない。その為か、夫は屈んで転がった毛糸を拾い広がった糸を巻き直し手渡してくれたのに、今の私の口からは……お礼の言葉さえ出てはこない。

「……お前、何か変だぞ？」

「そんなこと、ないわよ」

引きつった顔で笑って置いて、何がそんなことないのか……自分でもバレバレなのは分かっている。それでも、今の私に何が出来なのか……何を言えるのか。

異世界の記憶を頑固にもいまだ忘れることなくしつかり覚えている私には、何度悩んでも、泣いても、叫んでも、傷ついても、答えは見つからない。

あのタンポポのように可愛らしい色を持つ少年がこの先苦しむことを知っていて、それでも私は、全てを身の内に何十にも鍵をかけて仕舞い込むべきなのか。それとも……？

「はあ、なあんか……疲れちゃった」

その時、小窓から小鳥が飛び込んできて夫を呼んだ。

「……すまん、仕事だ」

久しぶりの休日に、また仕事？なんて一々苛ついていたら忍者の妻なんてやってられるか！と思いつつ、申し訳なさそうな顔の夫へ一言。

「帰りに御団子ね？」

「ああ、必ず」

その言葉を聞くや否や、窓から飛び出していくあの人を見送り……私はまた、編み物を再開するのだ。

式

「ふぁ、ねむ」

早朝、差し込む日差しを浴びながら目を覚ます。

「……いない、か」

何時もなら、ベットの空いた空間を陣取る夫の姿も無く……いまだに任務から帰っていないことを知った。

「二度寝、しよつかな」

なんて呟きながら、意識はもう半分眠り始めていて……

ドンドンドンッ!!

「……っ」

丁度良いくらいに夢の中へ飛び立とうとした瞬間……扉を叩く轟音が、突然我が家に響き渡った。……チャイム鳴らせよ!!

「ああもうっ!!胎教に悪いっての!!」

苛々しながらも平屋の廊下を早足で通り抜け、未だ鳴り続ける轟音を止めるために玄関扉を力いっぱい引っ張った……は？

「……」

そこにいたのは現在十三歳のはたけカカシで

「母さん、頼みがあるんだけど」

現在二十四歳の私が、うら若き十七歳の時に出会ったのがはたけサクモで、自殺を阻止したのがきっかけで……何故か苗字が「はたけ」になりました。

「とりあえず、久しぶりに家に帰ったんだから中で少し休みなさい。ほら、お茶入れてあげるから」

我が家の男は優秀すぎて仕事が忙しいせいか、家にいることが稀で、大抵私はいつも一人静かに過ごすのだけど……今日は少し賑やかそうだなあ。なんて考えながら可愛い息子を家内へと招き入れようとするも

「お茶なんて良いから、とにかく来てよ」

カカシはきつと手加減してはいるだろうけど、結構強い力で私の腕を引いた。

「っカカシ、出かけるならお父さんに聞かないと」

何とか玄関に踏みとどまり、そう口にすれば。今度は抱き上げられた……えっ？

「わっ、ちょっと何を」

「良いから」

何が良いの？玄関の鍵も締めてないし、洗濯物も干してないのに！？

訝しんで顔を覗けば、別段ふざけているわけでもないみたいでどう反応すればいいのか……困惑している内にたどり着いたのは火影様の執務室。

うわ、帰りたい。顔には出さないものの、内心物凄く焦っている自分にどうにか冷静になろうと小さく息を吐き……はあ、やっぱり駄目だ。まだどちらにするか決めてはいないけど、傍観するなら関わり合いにならないようにしようって昨日決意したばかりなのに……

「母さん？具合悪い？」

「え？大丈夫、多分」

それを聞いた小さな力カシは私をふかふかのソファへ下ろし、壁際へ下がってしまう。しまった！！大丈夫って言わずにもう倒れるくらいの勢いで体調の悪さを主張するべきだった！！

参

目の前に座る金と青の色を持つ青年を見る私の心は、とてつもなく複雑なのだけど。

「……」

四代目火影である波風ミナトは、私がこの部屋に入ったその瞬間から……笑顔を絶やさない。

「……おっほん!!」

見つめあい、微笑みあう私達へ痺れを切らした三代目様が盛大な咳払いを……

「ええと、あの、どのような御用でしょう。火影様方」

そして一般庶民でしかない私は権力に抗えず、目の前の青年と咳払いで話を促した両方の火影様へ問いかけた。

「うん、カカシくんのお母さん。お願いがあります」

「はあ?」

天下の英雄である四代目火影様が私ごときにお問い合わせですか?思わず、眉間にこれでもかとかばかりに皺が寄り……

「嫌です。お断りします」

どんな内容か聞く暇もなく、思わず口をついて出たのはそんな言葉で。

見ればカカシは怒ってるし、四代目様も三代目様も顔が引きつっているし。

でも、私自身は一般庶民だし。忍者とか関係ないし。夫とカカシも、里に貢献こそすれ迷惑とかかけてないからとやかく言われる謂れも無い。

なにより、私は今でも忘れていない。夫であるサクモさんがあの頃、里の人たちに投げかけられた暴言も、冷たい眼差しも。

散々守られてきた里の人たちが、たった一度のルール違反を認められずに、あの人へ何をしたのか。その結果、あの昼下がりの和室で、私が見た光景を……。

「……カカシ、お母さん帰りたいんだけど」

思い出したら、気分が悪くなってきた。

……未来を、どうにかしたいと思う気持ちは変わらないけど。それ以上に、今は大事なものがある。まあ、結局は自分が一番大事な初心者なだけだけどねえ。なんて、あのタンポポ少年を想いながら……里の人たちへの怒りも悲しみも、もう七年が経つと言うのに消化出来ずにいる自分にも若干呆れてしまう。

「……母さん、先生の話聞いてあげてよ」

カカシは頭のいい子だから、私のこんな考えもきつと気付いてるんだろうなあ。この七年間、私から聞かない限り全く仕事関係の話を口にしなかったもの。

だと言うのに、今日はその息子が、私をこの場所へ連れてきて、火影様と話をしると、そう言うのだ。夫のいない、この、状況で…

⋮
○

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2767ba/>

苗字が「はたけ」になりまして

2012年1月8日00時50分発行